

# 能「金札」

## 詞章

ところ 山城国 伏見

とき 春

登場人物 前シテ 老翁

後シテ 天津太玉神

ワキ 勅使

ワキツレ 従者二人

アイ 所の者

作者 観阿弥 又は世阿弥とも

典拠 不明

あらすじ 桓武天皇は平安京に都を遷したのち、伏見の里に大宮造りの勅使を遣わしました。

勅使が伏見に着くと参詣の人が多くいる中から老いた社人が現れて、自分は伊勢の国阿漕が浦に住む者と告げ、伏見の大宮造りは天も納受し地も潤う、誠にありがたい事と語っている所、不思議にも突然天より金の札が降ってきました。勅使が取り上げてこれを読むと、社人は伏見の謂れなどを説き、実は自分は伊勢大神宮の使者、天津太玉命であると明かして消えていきます。勅使が神のお告げを待っていると、天津太玉の神は本体を現わし、弓矢で悪魔を射払い、神威を示して、国が治まる事を寿いで消え失せていきました。

## 詞章

※ワキ方・狂言方の流儀等により、一部詞章の異なる場合があります。  
仮名遣いは現代風に一部改めております。

ワキ勅使が従者を二人連れ舞台に入り向かい合う

ワキ 次第 風も静かにならの葉の。風も静かにならの葉の。

ならさぬ枝ぞ長閑き

そもそも是は桓武天皇に仕え奉る臣下なり。さても山城の国愛宕の群に。平の都を立て置き給い。国土安全のみぎんなり。

同じく当国伏見の里に。大宮造りあるべきとの勅詔を蒙り。

シテは主役のこと。ワキは脇役の「脇」で、シテの相手役。場面設定をしたり、シテから話を聞きだしたりする役割を担う。能はシテに焦点を絞った曲が多く、この曲のようにほぼシテとワキの二人で話が進むという曲も多い。シテの多くは神や鬼、あるいは何かの霊や精なので、ワキはそのような非現実的な存在と出会い、対話する、観客の代表という面も持つ。ワキは必ず生きている男なので面をかけることはない。シテとワキはそれぞれ専門職で、シテ方はシテ、ワキ方はワキしか演じない（その他、ツレはシテ方、ワキツレはワキ方が演じる）。アイは「間」と書き、前半と後半の間に登場することが多い。シテが装束を替えている間の時間を埋める役を担い、ストーリーには直接関わらないことが多い。これは狂言方が演じる。

只今伏見に下向仕り候。

それ久方の神代より。天地ひらけし国の起こり。天の瓊鉾にほこの直なるや。名も二柱の神々に。八洲の国を造り置き。皇代なれや大君の。御影長閑き時とかや。

道行

青丹よし奈良の葉守の神心。奈良の葉守の神心。末暗からぬ都次路の。直なるべきか菅原や。伏見の里の宮造り。大内山の影高き。雲の上なる玉殿の。月も光や磨くらん。

シテ老翁の姿を装い登場し、常座に立つ

シテ

あら貴たつとの御造りや。聞くも名高き雲の垣。霞の軒も玉すだれ。かかる時代に逢う事よと。命うれしき長生きの。天晴れ老いの思い出や。

ワキ

ふしぎやな参詣の人々多き中に。怪したる宜禰きね御辛のさきに進むぞや。そも御身はいづくより参詣のひとつぞ。

シテ

これは伊勢の国阿漕が浦に住む者なるが。当社伏見の大宮造り。天も納受し地も潤う。王法を尊み来たり。

ワキ

そも王法を尊むとは。如何なる望みのあるやらん。

シテ

そもかかる身の望みとは。そら恐ろしやこの歳まで。命すなおに愁いもなく。上直ぐなれば下までも。豊かに治まる此の国の。

地謡

千代をこめたる竹の杖。千代をこめたる竹の杖。伏見はこれか宮所。参りて拜むこそ朝恩を知れる心なれ。

春は花山の木を切れば。春は花山の木を切れば。袂にかかる白雪。深き井桁を切るなるは欄井のつるべ縄。また泰山の山下、水その巖石を切り石。

地謡

ロンギ

車を造る椎の木。車を造る椎の木。

シテ

船を作る楊柳。

地謡

木の間になさん槻の木。

シテ

それは秋たつ桐の木。

地謡

君に齡をゆづり葉や。

シテ

千歳の松は切るまじ。

地謡

名は春の木の枝ながら。花はなど榊葉。  
これは神の宿り木。恐れあり切るまじ。

折柄天から金札が降つてきた態で

シテ

あらふしぎや。天より金札の降り下りて候。  
すなわち金色の文字すわれり読み上げ給え。

シテ立ち金札を勅使に渡す

ワキ

げにげに天より金札の降り下りて候ぞや。  
取り上げ読みてみれば何々。

抑々我が国は。真如法身の玉垣の。内にすめるや御裳濯川みもすそかわの。

流れ絶えせず守らん為に。伏見に住まんと誓いをなす。

シテ

さて此の伏見とは。何とか知ろし召されて候ぞ。

ワキ

ことも愚かや伏見の宮居。この御社の事なるべし。

シテ

あら愚かや伏見とは。総じて日本の名なり。

伊弉諾伊弉冉の尊。天の岩倉の苔筵に。伏して見出したりし国なれば。

伏見とは此の秋津洲の名なるべし。

地謡

人知らぬことなり此の国も伏見里の名も。ふし見る夢とも現とも。  
わかぬ光の中よりも。金の札をおっ取って。

かき消すように失せけるが。暫し虚空に声ありて。

伏見の里に夢とも現ともわからない光の中で、金の札を手に取りかき消すようにみえなくなるが、しばらくすると空中に声がして

シテ

是は伊勢大神宮の御遣わしめ。天津太玉の神なり。

猶しも我を拜まんと思わば。重ねて宮居を造り崇むべしと

地謡

迦陵頻伽の声ばかり虚空に残り。雲となり雨となるや雷の。  
光のうちに入りにけり光のうちに入りにけり。

シテ中入り

地謡

楽に引かれてことりその。舞の袖こそ。ゆるくなれ。

後シテ宮の中にて謡う

シテ

守るべし。我が国なれば皇の。萬代いつと。限らまし。

地謡

限らじなきらじな。栄行く御代を守りのしるし。

シテ

唯重くせよ。神と君。

地謡

重くすべしや重くすべしや、扉も黄金の御札の神体、光もあらたに見え給う。

引き廻しが下ろされ、弓矢を持った天津太玉の神が現れる

地謡

四海を治めし御姿。四海を治めし御姿。

シテ

新たに見よや君守る。

地謡

八百萬代のしるしなれや。悪魔降伏の真如の槻弓

さてまたつきには五月蠅なす。あらふる神も祓いの神籬

その神託は数々に。左も右りも神力の。悪魔を射払い清めをなすも。

金胎両部の形なり。

【舞ハタラクキ】神仏や龍神・天狗などが威勢を示したり、勇壮に立ち働く舞事。

笛・小鼓・大鼓・太鼓にて奏される。

シテ

とても治まる国なれば。

地謡

とても治まる国なれば。中々なれや。君は舟。

とういせいじゆう なんばんほくてき

臣は瑞穂の国も豊かに治まる代なれば東夷西戎、南蛮北狄の恐れなければ

弓をはずし、劍を納め。君もすなおに民を守りの御札は宮に。

納まり給えば影さしおろす玉すだれ。影さしおろす玉簾の。

ゆるがぬ御代とぞ。なりにける。